

## 現代日本語の文の意味と機能 -文の意味の形-

著者	小針 浩樹
号	18
学位授与番号	232
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/37042">http://hdl.handle.net/10097/37042</a>

# こ はり ひろ き 針 針 浩 樹

学位の種類 博士(文学)

学位記番号 文 第 232 号

学位授与年月日 平成18年7月13日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

最終学歴 平成9年3月  
東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程退学

学位論文題目 現代日本語の文の意味と機能 一文の意味の形—

論文審査委員 (主査)  
教授 齋藤 倫明 教授 小林 隆  
教授 才田 いずみ

## 論文内容の要旨

### 【本論文の目的】

本論文は、現代日本語を対象として、その文の意味と機能を、理論的に研究しようとするものである。表題は、「現代日本語の文の意味と機能 ——文の意味の形——」である。副題における「意味の形」とは、言語事実の根底に、伏在的しかし必然的に存在する、意味の一般的なあり方、言語の内形のことである。本論文の目的は、こうした「意味の形」を、いくつかの主題にわたって解明することにある。

### 【本論文の概要】

第1章では、文法および文法論についての、全般的そして準備的な考察を行う。

第1節では、「文法」という規則の性格について論ずる。文法を他の規則と比較しながら、これが、「**構成的規則**かつ**自生的規則**」であることを述べる(下図)。

観点(1)	統制的規則	構成的規則	
観点(2)	人為的規則		自生的規則
例	食事のマナー 交通法規	サッカーのルール 将棋の規則	自然言語の文法

第2節では、文法を捉える観点、「**文法**」観について検討する。取り上げる観点、および、筆者の見解は、次のとおりである。

#### ① 言語単位に関わる問題

：文法論が、語と文を中心として展開するべきものであること。

② 語と文の関係についての問題

：文は語に原理的に先行する、と捉えられること。

③ 言語研究の領域に関わる問題

：本論文は、意味論と語用論の境界に位置する領域の論究を目指すこと、ならびに、「言語」「主体」「世界」の三者を統合的に捉える論を展開すること。

④ 文法への接近法の問題

：本論文は、「客観主義(生成文法)」でもなく、「経験基盤主義(認知言語学)」でもない、第三の接近法、「演繹的・規範的な経験基盤主義」を目指すこと。

第3節では、文法論の在り方について、すなわち、「**文法論**」論を述べる。そして、本論文が、言語事実の論理的根拠の解明を目指す、「説明派(文章派)」かつ「根拠・解釈派」と言い得る立場に立つこと、および、文法論は、「文法論のための文法」を考えるのではなく、「文法のための文法論」を目指すべきものであることを述べる。

続く第2章では、筆者の理論の基礎概念を提示する。最初に、言語の根本的定式として、「**言語は、言語主体と世界の媒介であり、また、言語主体と言語主体の媒介である。**」という捉え方を掲げる(これは、リクール Ricoeur, P. の見解に基づく)。この二つの媒介——**事態の次元・伝達の次元**——に関して、その基礎的な在り方についての見解を述べる。

第1節では、「**言語主体と世界との媒介**」、**事態の次元**における文について論ずる。筆者は、言語は、言語主体と世界の住处である、そして、言語において、言語主体と世界とが分化・裂開していく、と捉える。こうした文のあり方を、<**対象面**><**作用面**>の双面的統一体と呼ぶ。例えば、「この映画は面白い。」という文は、「この映画」の在り方、<**対象面**>を表わすと同時に、それを知る言語主体の知り方、<**作用面**>をも表わす。

こうした、世界と主体の相関、存在と行為の相関によって、文は、相対的・連続的に**五分類**される(これは、現実界の文・非現実界の文を通じて見出される)。この分類は、「言葉を世界に合わせる文」と「世界を言葉に合わせる文」との振幅、と言うこともできる。

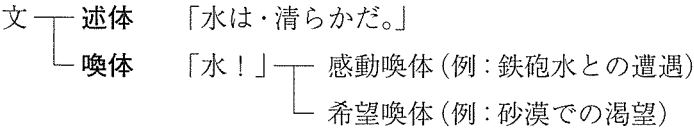
- 対象文① 「彼は学生だ。」「彼は旅に出たそうだ。」
- 対象文② 「このチケットは高い。」「彼は会社を休むかもしれない。」
- 対象文③ 「この映画は面白い。」「彼は会議に出なくてもよい。」
- 作用文② 「彼女にふられて悲しい。」「[言語主体が] フランス語を話せる。」
- 作用文① 「[言語主体が] 買い物に行く。」

また、この五分類は、より大局的に二分類することができる。

- **世界系列** : 「知る」系列 : 対象文①②③
- **言語主体系列** : 「する・創る」系列 : 作用文②①

「文」は、「事態」を表す。そしてそれは、「判断」に対応する。そうした文が備えるのが、「**主語と述語**」という基本構造である。文という全体は、「在るものと在り方」「知るものと知り方」「為すものと為し方」といった、二項の相関構造、部分への構造を備えるのである。

「主語・述語」という基本構造に基づいて、「述体・喚体」という文の区別が導かれる（これは、山田孝雄の論に基づく）。「述体」とは、主語と述語が実現的に対立した文、例：「水は・清らかだ。」であり、「喚体」とは、主語と述語が非実現的に対立した文、例：「水！」である。この喚体には、実・虚の二種、すなわち、感動喚体と希望喚体がある。



「主語・述語」からは、「単文・複文」という文の区別も導かれる。複文は、「主語・述語」が、より大きな文に組み入れられることによって成り立つ。複文とは、『語としての文』を含む文なのである。なお、文法論の基本に据えるべきものは、単文である。原理的に、単文は複文を包括するのである。

第2節では、「言語主体間の媒介」としての文、伝達の次元における文の基礎的な在り方について述べる。伝達は、話し手と聞き手の相互的な存在承認を、根本的な基底とする。そして伝達表現は、事態の次元の文が、「話し手・聞き手」という観点を契機として、伝達の次元に編み込まれることで成り立つ。それは、下図のような類型を成す。また、伝達表現それぞれには、「知らせる、言わせる」といった、話し手から聞き手への使役性が備わっている。

主体 系列	〔Ⅰ〕 話し手	〔Ⅱ〕 話し手と聞き手	〔Ⅲ〕 聞き手
世界系列	情報提供文 「この試験は難しいよ」	同意要求文 「この試験は難しいね」	質問文 「この試験は難しいか」
	知らせる	知らせつつ言わせる	言わせる
言語主体系列	意志表明文 「私は映画を見る」	勧誘文 「一緒に映画を見よう」	命令文 「映画を見ろ」
	知らせる	知らせつつさせる	させる

以上の基礎的考察を踏まえて、第3章以降、各論を展開していく。

第3章では、文の五分類の意味について論究する。第1節では、五分類を、文の内部構造である「主語と述語」の相関という観点から解釈する。そして、対象文①から作用文①への振幅を、「モノとモノ」の相関から「コトとコト」の相関への連続として捉える。

- 対象文① 「彼は・学生だ。」 : モノとモノ (対象と属性)
- 対象文② 「山が・高い。」 : モノとコト (対象と属性)
- 対象文③ 「あの子は・かわいい。」 : モノ (コト) とコト (対象・機縁と評価)
- 作用文② 「逢えて・(私は) うれしい。」 : コトとコト (機縁と情意)
- 作用文① 「私は買い物に行く。」 : コトとコト (行為記述と意志記述の一致)

こうした捉え方は、「語は語に相関し、句(文)は句(文)に相関する」という一般論に基づいている。「言語主体と世界」の相関は、「主語と述語」の相関と、相関関係にある、とすることができる。

第2節では、種々のテストを用いて、各類型の性格と、類型間の相互関係を明らかにする。

第4章では、叙法という文法範疇について論ずる。叙法についての筆者の見解は、現在の日本語学の

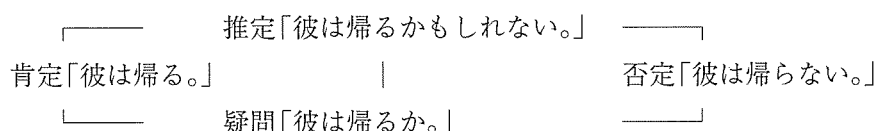
文法研究における代表的な捉え方(モダリティ論)とは、根本的に異なる。「モダリティ」ではなく「叙法」という用語を採るのは、そのためである。

第1節では、従来のモダリティ論の諸問題を、種々の観点——「主観・客観」という概念、モダリティ概念の変質、階層構造、文法範疇の相互承接、「命題」の問題、等——から指摘・検討する。

第2節では、叙法の根拠について論ずる。

- ① 人間言語の特徴の一つとして、言語の**再帰性**——言葉について言葉を語ること——が挙げられること。
- ② 再帰性の一つの現われとして、**複文**の存在が挙げられること。
- ③ 叙法は、複文を基礎とし、それが**単文化**する機構として捉えられること。
- ④ 叙法は、文の五分類の中に、**非現実界**を表す文として見出されること。
- ⑤ 叙法は、形容詞文と動詞文との関係、ならびに、
- ⑥ 存在と非在(肯定と否定)との関係、という観点の下で捉えられること。

叙法は、**存在と非在の間に**位置づけられること(下図における「推定」の部分)。



第3節では、叙法の機構について述べる。

- ① 「文」は、自らの内部に『**語としての文**』を持つことによって、「複文」となる。本章で論ずる『語としての文』とは、「在る対象・知る対象」と見なされた『文』、すなわち、“**主語性**”を付与された『文』である。文が主語性を獲得する方法には、二つある。

- (a) 『文』が自ら主語性を備える場合  
例：「彼が手紙を {書けば／書かなければ}」、「彼が手紙を書くかも」
- (b) 『文』が他の体言(形式名詞)に依存して主語性を備える場合  
例：「彼が手紙を書く {の／わけ／ほう／はず}」

- ② 『文』は、より大きな「文」の要素として実現される。その方法には、三つある。

- (1) [I] 述体における実現    例：「彼は手紙を書かなければ・(ならない)。」  
「彼は手紙を書いたほうが・(いい)。」
- (2) [I] と [II] の中間態    例：「彼は手紙を書く {よう／そう／の} だ。」
- (3) [II] 喚体における実現    例：「手紙を {書け／書こう／書くだらう}。」  
「手紙を書くこと。」

- ③ こうした複文は、その「主語・述語」関係を変化させることで、単文化する(以下の例における中点「・」は、主語と述語の“切れ”を示す)。

例：複文「彼が手紙を書くかも・しれない。」 →  
単文「彼は・手紙を書くかもしれない。」

このように、叙法における諸形式は、本来的には複文、実際的には単文、という二重性において捉えられる。「かもしれない」「なければならない」「ようだ」等の形式は、こうした「**複文の単文化**」に連動して、

助動詞化するのである。これは、“文法化”の問題の一つである。

こうした複文は、単文と共通する構造を備えている(下図)。

	単 文	複 文	
		(a)『文』自らが主語	(b)『文』が他に依存
[Ⅰ]述体	水は(～である)	書くかも(しれない)	書いたほうが(いい)
中間態	水だ		書くようだ
[Ⅱ]喚体	水!	書け、書こう	書くこと

第5章では、筆者が影響を受けた理論の一つである言語行為論について論ずる。

第1節において、オースティン Austin,J. とサール Searle,J. の言語行為論の概要を述べた後、第2節では、その問題点——サールの規則主義の問題、発語内効力(F)と命題(p)との錯綜した関係、発語内行為の分類基準の不明瞭さ、等——を指摘する。

第3節においては、言語行為論と筆者の論との関係ならびに相違点について論ずる。筆者の論における「言葉と世界の適合方向」という観点の用い方、「事態」と「伝達」の両次元を区別する意味、また、「話し手と聞き手」という観点を重視する姿勢、そして、言語形式への着目、といったことについて述べる。

第6章以降は、伝達次元における文について、論を展開する。第6章では、同意要求文について論ずる。この類型を導入することで、伝達表現の類型は体系的になり得ている(第2章の図を参照)。第1節では、同意要求文の、類型全体における位置について論ずる。

第2節では、同意要求文に現れる諸形式、①「ね」、②「よね」、③「だろう」、④「じゃないか」について論究する。

- ① 「寒いね。」「うん、寒いね。」における「ね」の性質は、三つの観点——(1)話し手・聞き手という観点、“「私たち」性”、(2)事態の＜作用面＞に関わる性質、“行為性”、そして、(3)終助詞が備える“文”相当の力価に由来する“推論性”——によって捉えられる。
- ② 「あの映画、面白いよね。」「うん、面白い。」における「よね」は、同じ行為に基づいた事態を、話し手と聞き手が相互に情報提供しあう、という機能を示す。「よね」は、「ね」と共通点を持ちつつも、機能上は「だろう」に近似する。
- ③ 「だろう」は、非在の事態を表す形式である。これには、二つの用法がある。

- └ 推量用法            例:「明日は雨が降るだろう。」
- └ 確認要求用法    例:「同級生に、田中って奴、いただろう。」

後者、確認要求用法においては、話し手が、存在(事態)を、敢えて非在化した形(欠如としての事態)で提示し、聞き手にその非在の存在化を求める、という機構が働いている。

- ④ 「同級生に、田中って奴、いたじゃないか。」「(プレゼントをもらって)いやあ、うれしいじゃないか。」における「じゃないか」には、存在を非在化し、更にそれを存在化する、という、二重否定に準ずる機構が働いている。

③「だろう」と④「じゃないか」の相違は、「だろう」では、非在の存在化が、聞き手に委ねられているのに対して、「じゃないか」では、その契機が形式そのものに含まれている点にある。「だろう」は、話し手と聞き手の共同作業、「じゃないか」は、話し手・聞き手それぞれにおける個別作業なのである。

第7章では、第6章を承けて、否定疑問文の諸相について論究する。

第1節では、先行研究を概観し、以下のことを論じる。

- ① 否定疑問文が、二つに分類されること。
  - └ 単純型 「(つまらなそうな表情をしている聞き手に対して) 面白くないか?。」
  - └ 誘導型 「(二人で面白い映画を見ながら) 面白くないか?。」
- ② 誘導型において、「傾き・片寄り(答えの見込み)」という現象が問題とされること。
- ③ 伝達表現の類型における、否定疑問文の分布。

第2節では、「否定」「肯定」「疑問」の関係を論ずる。

- ① 「否定」と「肯定」は、単に対立的・対等的な二者であるのではなく、否定が『肯定的事態』の上に立つこと。「肯定」と「否定」は、次のように分析できる。

- └ 肯定 = 肯定的な事態 positive Objektiv に対する、作用的な肯定 affirmation
- └ 否定 = 肯定的な事態 positive Objektiv に対する、作用的な否定 negation

- ② 「疑問」は、「肯定」と「否定」の間に位置づけられること(第4章の図を参照)。

以上の考察に基づいて、「傾き」が、否定疑問文において顕著に現れる機構を論ずる。否定疑問文は、

(1) 肯定的事態を否定した上で、更に、(2) その否定を疑問化したものである。

- (1) 肯定「面白い」 → (肯定的事態)『面白い』 → 否定「面白くない」
- (2) 肯定「面白い」 ← 疑問(否定的事態)「面白くないか」 ← 否定「面白くない」

そのため否定疑問文は、肯定への“振り戻し”の力が強い——肯定の答えを予測・誘導する「傾き」が強い——と考えられるのである。

否定に対しては、次のような、相関的な二つの分析が可能である。

- └ 否定的な事態 negative Objektiv に対する、作用的な肯定 affirmation  
例:『面白くない』に対する「然り」
- └ 肯定的な事態 positive Objektiv に対する、作用的な否定 negation  
例:『面白い』に対する「ない」

否定疑問文の二分類の根拠は、こうした否定の二分析にある。

- └ 単純型否定疑問文 = 否定的な事態に対する、作用的な肯定をめぐる疑問文  
例:「(つまらなそうな表情をしている聞き手に対して) 面白くないか?。」
- └ 誘導型否定疑問文 = 肯定的な事態に対する、作用的な否定をめぐる疑問文  
例:「(二人で面白い映画を見ながら) 面白くないか?。」

また、同意要求文として機能する三形式、「面白いだろう?。」「面白いじゃないか。」「面白くないか?。」を比較し、その性質を考察する。三者は、次のような関係にある。

形式 \ 観点	聞き手の参与の仕方	非在の存在化の機構	非在の表わされ方
「だろう」	共同作業	直接的	一体的・対象的
「じゃないか」	個別作業	二重否定的	一体的・対象的
「ないか」	共同作業	二重否定的	述語への組み入れ

第8章では、イントネーションの伝達機能について論究する。

第1節では、先行研究を概観する。イントネーションの類型、イントネーションと文末形式（終助詞等）との関係についての諸研究を整理し、その問題を指摘する。

第2節では、イントネーションの機能の根拠について、考察を行う。最初に、イントネーション類型の整備を試みる。次に、イントネーションの二大類型、**下降調「㇏」**と**上昇調「㇑」**の根拠を論ずる。その根拠は、話し手が、相手を、自らと同様の「話す」存在であると承認することにある。続いて、イントネーションそのものが自立的な意味を持つ、その根拠を論じる。伝達とは一般に、伝えること[事態]と伝えること[行為]から成る。両者は相関している。伝える事態が整序されることに即応して、伝える行為も、相対的に自立性を備えていくのである。イントネーションは、伝える行為を表す。そしてそれは、「話し手が聞き手に{下降調㇏：知らせる／上昇調㇑：言わせる}」という、“**文**”相当の力価を持つのである。

第3節では、イントネーションと文末形式との関係について論じる。まず、一つの伝達表現の機能を性格づける要因として、「**事態**」、「**終助詞**」、「**イントネーション**」の三者を挙げる。そして、伝達表現におけるそれらの相関を論じる。相関の方法には、二つある。

- ① 事態 × イントネーション 例：「行く {㇏・㇑}」
- ② 事態 × 終助詞 × イントネーション 例：「行くね {㇏・㇑}」「行くよ {㇏・㇑}」

そして、終助詞やイントネーションの機能を、伝達表現の類型の決定力、という観点から分析する。それは、[本務]と[副務]に分けられる。すなわち、ある要因が伝達表現の類型を決定づける場合、すなわち、＜類型間＞の区別のために機能する場合は、[本務]として捉えられ、一方、ニュアンスを多様化・重層化させる場合、すなわち、＜類型内＞で機能する場合は、[副務]として捉えられる、ということである。

- 本務 : <類型間>での機能 例：「行く ㇑」における上昇調「㇑」  
= 質問文という類型を決定する要因
- 副務 : <類型内>での機能 例：「行くよ ㇑」における「よ」と上昇調「㇑」  
= 情報提供文という類型内での多様化

## 論文審査結果の要旨

本論文は、8つの章から構成されている。

「第1章 文法・『文法』論・『文法論』論」では、文法という規則を「構成的規則かつ自生的規則」であると規定し、本論文の「文法」観について4つの観点から検討したうえで、本論文は、文法論として、「説明派（文章派）」かつ「根拠・解釈派」と言いうる立場に立つことを述べる。

「第2章 文法論の基礎概念」では、言語を「言語主体と世界との媒介」、「言語主体間の媒介」と捉えることから出発し、前者、すなわち事態の次元に関して、文を存在と行為の相関によって5つに分類すること、文の基本構造が「主語と述語」にあること、それに基づき、「述体・喚体」「単文・複文」という文の区別が導かれることを論ずる。また、後者、すなわち伝達の次元における文の基礎的な在り方についての考え方を提示する。



「第3章 文の五分類の意味」では、本論文における文の5分類、すなわち、「対象文①・対象文②・対象文③・作用文①・作用文②」の有する意味合い、および分類根拠について論ずる。前者については、「主語と述語」の相関という観点から、この分類を「モノとモノ」の相関から「コトとコト」の相関への連続性として説明し、後者に関しては、種々のテストを用いて各類型の性格と類型間の相互関係を明らかにしている。

「第4章 叙法論」では、従来の日本語学におけるモダリティ論を批判的に検討した後、叙法の根拠について、言語の有する再帰性、複文の存在とその単文化、を挙げ、叙法は文の5分類中に非現実界を表わす文として見出されること、および存在と非存在（肯定と否定）の間に位置づけられることを述べる。さらに、叙法の機構について論じ、「かもしれない・なければならない・ようだ」等の形式がいかにして助動詞化するかを示す。

「第5章 言語行為論との関係」では、本論文が影響を受けた理論の一つであるオースティンとサールの言語行為論を取り上げ批判的に検討した後、本論文と言語行為論との相違に関して、「言語と世界の適合方向」という観点の用い方、「事態」と「伝達」の両次元を区別する意味、「話し手と聞き手」という観点を重視する姿勢、の3点に亘って明らかにしている。

「第6章 同意要求文の位置と形式」では、同意要求文が伝達表現の類型全体の中で占める位置について論じ、それが、話し手・聞き手が同等の立場に関わるものとして事態が取り上げられる文であり、同じ世界系列に属する「情報提供文」と「質問文」との間に位置することが示される。また、同意要求文に現われる諸形式、「ね」、「よね」、「だろう」、「じゃないか」について検討し、その相互関係について明らかにしている。

「第7章 否定疑問文の諸相」では、否定疑問文に関する先行研究を概観した後、「否定」「肯定」「疑問」の関係について論じ、否定と肯定は単純に対立するのではなく、否定は肯定的事態の上に立つこと、疑問は肯定と否定との間に位置づけられることを示す。そのうえで、否定疑問文に「傾き」（肯定の答えの予測・誘導）が顕著に表われる機構について論じ、否定疑問文の肯定への“振り戻し”の力によって説明することを試みている。

「第8章 イントネーションの伝達機能」では、先行研究を概観した後、イントネーションの機能の根拠について考察し、伝えられる事態が整序されるに従い、伝える行為としてのイントネーションが「文相当の力価」を有するようになるからであると論ずる。また、イントネーションの機能を、伝達表現の類型の決定力という観点から分析し、類型間の区別のために機能する「本務」と、類型内で機能する「副務」とに分けることを提案する。

以上、本論文は、言語事実の根底に存在する意味の一般的な形を「意味の形」と捉え、文法論はそうした外形的事実に対する論理的根拠としての「意味の形」の内実を探るべきであるという立場から、現代日本語における文の意味と機能の諸相について論じたものである。独自の観点からする文の5類型の提示や、同意要求文・否定疑問文の処理等、具体的分析に関しても見るべき点が多いが、特に、森重敏や川端善明の文法論に基本的に拠りながらも、本論文独自の文法論の体系を緻密な論理構成のうちに提出しようとした点で高く評価されるとともに、外形的事実の記述や分類に陥りがちな現代日本語の文法論に対して寄与するところが大きい。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。